麻畑に逃げ込んで震えていた日

大出静江　81歳・鹿沼市

●「がまん」と「恐怖」

戦争中は大人も子供も、毎日じっとがまんして暮らしていました。「ほしがりません、勝つまでは」という標語がありました。食べ物も学用品も少ししかなく、本は上級生のものを借りて使っていたのです。

大人も子供も心を一つにして頑張りました。先生と一緒に校庭を耕してさつま芋や大豆を作り、乾燥させて戦地の兵隊さんに送りました。また、「アカソ（赤麻）」という植物を刈り取って乾燥させ、学校へ届けました。これは兵隊さんの洋服になると聞きました。子供も大人の仕事を手伝って一生懸命働きました。農家の子どもは田畑の仕事を、非農家の子供は幼児の面倒を見るなど「働くことは生きる事、生きることは働くこと」と、誰もが考えていました。それでも食べ物が少なくて、ご飯、野菜、卵などを食べられた人は幸せで、毎日芋だけでがまんしていた人もありました。肉や魚を売っている店はなく、お菓子や砂糖も買えないので、栄養失調状態の人もたくさんいました。ですから、病気になるとなかなか治らず、亡くなってしまうのです。どこの家でも悲しい事ばかり続きました。

終戦の前まで、学校の行き帰りにも空襲がありました。当時、家から７００～８００㍍歩いて線路を横切って栃木街道に出て、磯町の南押原小学校まで20分くらい歩いて通っていました。

「飛行機を見たら、目と耳をふさいで地面に伏せて、林のような所とか、体が隠せるお茶の木の下や麻の畑の中に隠れなさい」と先生に言われていました。アメリカ軍の飛行機が並んで飛んでくると、急いで道路の近くの木を見つけて隠れ、目を固く閉じ、耳を押さえて飛行機が飛び去るのをじっと待っていました。背の高い麻畑の中に駆けこんで、震えながらしゃがんでいたこともありました。

あるとき、飛行機からキラキラ光るものがたくさん落ちてきてきれいに見えたけれど、何だったのかは分かりませんでした。（注：金属は、電波を反射する性質があるため、これを散布して、レーダーの電波妨害を目的とした「チャフ」を撒き、敵の目をごまかそうとするもの。従来はアルミ箔を切ったものであった）

小さく見えたのでとても高いところだったのでしょうが、ものすごくたくさんの飛行機がゴーッと音をたてて飛んでいたのを何度も見ました。恐かったです。日本にはもう飛行機がなかったのでアメリカの飛行機だったのだと思います。

鹿沼の空襲の時は空が赤くなったのを憶えています。周囲の白い壁の家は目立つからと、みな竹箒に墨を付けて黒く塗っていました。後になって、自分が飛行機に乗って分かったことですが、いくら壁を黒くしても全部見えていたことでしょう。また、敵が来たら竹槍で向かっていこうとしていたようですが、同じように、今考えると滑稽です。

●父の出征

父は、私が小学校１年生のとき出征しました。その時のことを憶えています。現在、千葉省三記念館のある、当時の南押原村役場に、出征する軍人が集まって挨拶をしたのです。そのとき父は「本村に生を受けて32年、お世話になりました」と言いました。他の方も挨拶しましたが、もう何十年も経ってしまったので憶えていません。

国内にいたころ、神奈川県厚木市の海軍航空隊に入隊したので、家族４人で面会に行きました。父は前より少し痩せていたけど、私たちを見つけるとニコニコしながらすごい勢いで走ってきて、私と姉と弟を一人ひとり高く抱き上げてくれました。しかし、嬉しかったこの日が父との永遠の別れの日となりました。父は終戦の少し前に太平洋で軍艦に乗船中、アメリカ軍機の爆撃を受けて海に沈んで亡くなりました。

私は毎年、お盆やお彼岸の墓参りをして父と話をします。「私と夫、二人の娘、孫たち、そして私たちを助けてくれる周囲の皆様を守ってください」すると、お別れしたときの父の笑顔が浮かんできて「頑張るんだよ」と言ってくれるのです。

●医王寺で見た学童疎開の子どもたち

近所の医王寺に子ども達が１００人くらい、学童疎開で来ていました。面白半分に、知らない子達がいるから見に行こう、と友達と行きました。お釈迦様の花祭りの時に、檀家の人たちが集まるようなとても広い所に、小学校の低学年の子どもたちが所狭しと並んでいました。東京から疎開している子どもたちで、「疎開っ子」と言われていました。お椀を前にみんなで手を合わせて「箸とらば、天地　御代の御恵み　父母や　祖先の恩を忘るな」と揃って唱えてから食べていました。学校の先生が付いてきて、そこで勉強をしていたようです。泣いている子を見たことがありましたが、多分親が恋しくて泣いていたのだと思います。その中の誰かとお話をしたこともなく、ただ近くで見ていただけでしたが、そういう姿を思い出します。医王寺の皆さんは子どもたちに優しかったと思います。

●戦争が終わった日

私が小学校３年生の夏休みのことです。昭和20年８月15日、川遊びから帰ってくるのを待ちかねていたように、「天皇陛下のお言葉があるから早くここに座りなさい」と母がせかしました。私と姉と弟の３人は母と並んで正座し、母は膝に１歳の妹を抱いて、みんな頭を下げてラジオから聞こえてくる天皇陛下のお言葉を聞きました。それは日本が戦争に負けたことを知らせる言葉だったそうですが、そのときは難しい言葉でよくわかりませんでした。でも、「堪え難きを耐え、忍び難きを忍び」という言葉をよく憶えています。大人の人たちが泣いていましたから、「日本が戦争に負けた」という放送なのだな、ということくらいはわかりました。

大人の人たちは、「これからどうなるのだろう」、「アメリカの兵隊が来ると女の人は何をされるかわからないから、もし何かあったら自分から死んだほうが良いのじゃないか」、「戦おうとしても、どっちみちあちらの方が強いから、やられないうちに死ぬしかないのじゃないか」というような話をしていましたが、私には、女の人が乱暴されるという意味もわからないから、「死ぬほどひどいということ」の意味がわかりませんでした。後になって、岸壁から飛び降りた沖縄の人たちは、そういう同じ気持ちだったのだ、とわかりました。

戦後、学校にアメリカの兵隊が来ました。授業中に１８０㌢以上もある大きい兵隊が２人、ガラッと教室のドアをノックもせずに開けて入ってきたときはびっくり仰天、恐かった。日本人と全然違うので、怪人が来たかと思ったほどです。何のために来たのかはわかりませんでした。

小山街道をよくアメリカ兵が乗っているジープが通りましたが、子どもがチョコレートを欲しがって追いかけて行くような事がありました。私の同級生の妹さんがアメリカ兵の乗るジープに轢かれて片足が不自由になってしまうということもありました。

●今の子どもたちに伝えたい

今の子どもたちに伝えたいことは「もっと命を大切にして欲しい」ということです。いじめられたから自殺してしまうような事では、命がもったいないと思います。もう少し我慢ができないかな、と思います。先生にひいきされたため、私もいじめにあっていましたので、いじめとはこういうものだと知っています。「死んだつもりになったら何でもできる」と私の母が言っていましたが、そう考えて、「ちょっとしたことに負けないで死なないで欲しい」と今の子どもたちに言いたい。

お父さん、お母さんは子どもを大事に育てていますが、大切にし過ぎているようにも思います。何かに直面したときに、もう一歩頑張って、そして親に言う勇気を持って欲しいです。大事に育てている反面、子どもが親に悩みを言えない状態があるという事が私には理解できません。自分の孫

には「ばあちゃんが命がけで守るから、いじめられたら言ってね」と言ってあります。その言葉を聞いただけで子どもは安心するのではないでしょうか。

今から72年前、アメリカ軍に落とされた原子爆弾によって日本は大きな被害を受け、たくさんの尊い命を失いました。そして第二次世界大戦が終わったのです。当時私は9歳でしたから、難しい事はわかりませんが、戦争は二度と起こらないようにと願っています。

〈平成29年9月、お話を伺ってまとめました〉

戦争のころの思い出

大出利文　鹿沼市

私と妻は小学校の同級生で、3年生のとき終戦を迎えました。当時は同級生であっても女の子とは親しく会話をすることもなく、男子は強く、辛抱することが美徳とされていた時代でしたので、いつも男同士で野山を裸足で駆け回り、戦争ごっこをしていたことが記憶に残っています。

「将来どんな人になりますか？」と先生に問いかけられると、誰もが「兵隊さん」と答え、「僕は飛行機乗り」「僕は海軍になって軍艦に乗る」などという言葉しか聞かれませんでした。「負ける」という言葉は禁句で、常に天皇陛下を崇拝し、神風が我々を守ってくれると信じていました。

校庭には食糧増産のため、先生とともにサツマイモをはじめとしていろいろな野菜を作りました。そのサツマイモを薄く切って乾燥させ、兵隊さんの食糧にと供出したことを憶えています。

空襲がひどくなったころ、我が家の長屋門は白壁だったため、米軍機の目標になると困るからと、墨汁で黒色に塗りつぶしました。

学校から帰ると勉強は後にして、進んで農作業を手伝い、不満を言う人は一人もありませんでした。また、同級生の中には、家の人が忙しく赤ちゃんの面倒をみられないので赤ちゃんをおんぶして学校に来て、先生におむつを取り替えてもらっていた人もありましたが、誰一人として笑うことも、いじめることもしませんでした。

終戦後70年以上たった最近の同級会では「他人を思いやる心、辛抱強い心はあの頃から培われていたんだね」「これからも同級生みんな仲良く頑張って行こうよ」「次の同級会も元気で出席しようね」いつもこんな会話を交わし合う私たちです。